初度来日時におけるジェーンズ大尉と熊本洋學校生
── ABCFM 宣教師文書とキャプテン・ジェーンズ資料の書簡を通して ──

石　井　容　子

はじめに

L. L. ジェーンズ（Janes, Leroy Lansing、1837－1909）は、明治初期、熊本洋學校においてただ一人で若者に人格教育と英語による普通教育を施したアメリカ人教師である。

同志社大学所蔵アメリカン・ボード（The American Board of Commissioners for Foreign Missions、ABCFM）宣教師文書[1]のうち花岡山献身事件後一年間を含む熊本に関する書簡、及び、熊本市教育委員会所蔵キャプテン・ジェーンズ資料[2]の書簡を117通閲覧したところ、一部の書簡にジェーンズの履歴や教育に対する姿勢・考え方などが記されていることが分かった。それは、キャプテン・ジェーンズ資料書簡７通、及び、ABCFM 文書ジェーンズ書簡11通と同 J. D. デイヴィス[3]（Davis, Jerome Dean、1838－1910）書簡26通、同 O. H. ギューリック（Gulick, Orramel Hinckley、1830－1923）書簡２通、同 S. L. ギューリック（Gulick, Sidney Lewis、1860－1945）書簡１通の計47通（後述一覧参照）である。

デイヴィス書簡の大部分は、ABCFM 外国通信部（the foreign correspondence）の重責を一人で背負った総主事、N. G. クラーク[4]（Clark, Nathaniel George、1825－1896）に宛てて、日本における伝道事業を報告したものであるが、彼の上記26通の書簡には、ジェーンズに関する情報が多く記されている。デイヴィスがクラークに宛てたジェーンズに関する第一報は、「九州の奥地に住む米国人教師が、基督教に改宗して迫害を受けている生徒を同志社に託したいと願っている」という最新情報を伝えたものだった。デイヴィスの書簡にジェーンズに関する記述が数多く見られるのは、その後、デイヴィスがジェーンズに ABCFM への加入と同志社カレッジ設立の支援を要請したためである。

本論では、上記の書簡を通して、ジェーンズの来日から最初に帰米した頃までの足跡を追いたい。具体的に述べると、彼が明治４年に熊本洋學校に着任してから、明治９年10月７日に離熊し、紆余曲折を経て、同年11月１日に大坂英語學校に雇用されたものの、翌10年４月10日に依願退職して帰国し、２年を経た頃までの８年間の事跡である。さらに、書簡には、平信徒であるジェーンズと、キリストへの献身を決意し同志社に集結した元熊本洋學校生（熊本バンド）の絆が描かれているうえ、これまであまり明らかにされてこなかった熊本バンドの伝道の様子も記されており、興味深い。これらの書簡には、F. G. ノートヘルファー氏（Notehelfer, F. G.）の著書 *American Samurai* で使用されている箇所があったので、照合後、できる限り同書に記されていない部分を引用した。本論の構成上、同書と重複する叙述を提示しなければならない場合は、書簡の内容に従って、同書の叙述より詳細な情報を付言するように努めた。

1. 熊本の歴史的背景とジェーンズの初度来日（明治４年から同10年）における履歴

熊本洋學校において、ジェーンズは、生徒達に最も質の高い啓発と福祉を保障した。その後、彼らはクリスチャンの如何に拘わらず、熊本県内外の学校や事業に、或いは、政治に貢献した。これらの源は、全て、熊本洋學校におけるジェーンズの教育にあるだろう。そして、ジェーンズがこの熊本で教職に就くことができたのは、横井小楠の甥、横井大平ら肥後実学党に関わる人達の尽力を抜きにして語ることはできない。[5] 本節では、『新熊本市史』などに基づき、明治の初年の熊本の歴史的背景と、ジェーンズが来熊した明治４年から、最初に帰国する明治10年までの彼の履歴を述べたい。

1868（明治元）年明治元年４月、肥後実学党の祖の一人である横井小楠（1809－1869）が新政府に召し出されるが、明治２年１月５日に京都寺町で暗殺された。翌明治３年５月８日、細川護久（1839－1893）が熊本藩知事に就任すると、彼は、翌月６月には弟の護美（1842－1906）を熊本藩大参事に任じ、実学党の人々を重用して藩政改革を指示した。教育改革として、熊本藩は、７月８日に時習館、洋學所、再春館等を廃止した。明治３年10月６日に、長崎から洋方医を招いて熊本藩立病院を開院し、翌明治４年、漢方医学を教授した再春館に代わって、元オランダ海軍軍医ファン・マンスフェルト（Van Mansvelt, C. G. V.、1832－1912）を招聘し、西洋醫學所が開校した。また、横井大平の進言により、主に漢学を教授した時習館に代わって、南北戦争に士官として従軍した元砲兵大尉ジェーンズを招聘し、明治４年９月１日に熊本洋學校が開校した。[6] ジェーンズの雇用契約期間は、明治４年８月28日から明治７年10月７日までの３年間だった。[7]

明治５年８月３日、学制頒布で、それまで旧藩や県が自由に設立した学校の廃止が命じられ、文部省は外国人教師の俸給を差し止めることが決まった。[8] しかし、細川護久候が私財を充てることで洋學校は存続できることになり、ジェーンズは３年の任期が切れた後も、教師の仕事を続けることができたのである。明治７年10月３日に熊本洋學校二度目の開校式が行われ、その翌８年７月に洋學校一級生（明治四年撰入生）が卒業した。京都で官許同志社英學校が開校したのは、同年11月29日のことである。

明治９年１月30日、洋學校生徒有志が花岡山で「奉教趣意書」を朗読して神に祈り、35人が誓約をした花岡山結盟事件が起こった。熊本洋學校は、二級生（明治五年撰入生）が卒業した後、同年９月で廃校となっている。先年横井小楠が暗殺されたのは彼の思想が余りにも進歩的で「耶蘇教を信じた」と疑われたためだと言われ、それ以降、実学党にとって基督教は禁忌であったと考えられる。従って、実学党が創設したと言える熊本洋學校から基督教を信仰する生徒が多数出たことで、関係者は大いに動揺し混乱したものと推察する。結盟者の中に小楠の嫡男、時雄までいたとなれば、なおさらのことだったであろう。[9]

その後、ジェーンズは熊本を離れ、明治９年11月１日から同11年７月31日まで２年の雇契約[10]で、大坂英語學校に勤務し始めた。しかし、明治10年４月10日に同校を依願退職し、[11] 同年５月に、妻ハリエットと４人の子供とともに帰国の途についた。

2. 熊本洋學校におけるジェーンズと基督教教育

キャプテン・ジェーンズ資料の書簡には、ジェーンズがアメリカに住む母親に宛てて子供達の成長を知らせるもの、九州で連鎖した反乱が次々と鎮圧された情勢を友人に伝えるもの、さらに、長老派教会の長老だった父親に宛てて、混乱する熊本の街をエルサレムに見立て「破壊されるかもしれな

い」と不安を訴えるもの、或いは、息子（山田謙次、一級生）が無事卒業したことに対する保護者山田武甫[12]（1831－1893）が、息子の英訳文を添え、謝辞と息子の進路（医道）をジェーンズに伝えるものなど、熊本時代の日常が記されていた。しかし、本節では、熊本洋學校におけるジェーンズの宗教教育に焦点を絞り、キャプテン・ジェーンズ資料書簡の他、ABCFM 宣教師文書書簡、ジェーンズの著書 *KUMAMOTO*、及び、洋學校元生徒の回顧録などを通して、生徒が基督教を学ぶようになった経緯を再検認した後、花岡山事件後のジェーンズの動向を提示したい。

ジェーンズは「およそ４年間、熊本で生徒に宗教を説いてきました。」（デイヴィス宛、1876年２月７日付）と書簡に書き残している。彼は「英語普通學教師」[13]として雇用され、洋學校で基督教教育を行うことはできなかった。1875（明治８）年に開校した官許同志社英學校においても、新島襄は、文部大輔田中不二麿から「説教は校舎以外の場所で行う」よう勧告（デイヴィスからクラーク宛、1876年２月15日付）を、さらに、京都府知事を通して校舎で聖書講義は許可できないという政府の指令（同、1876年10月16日付）を受けたため、朝に新島の自宅で対観福音書の講義が、午後にはデイヴィスの自宅で使徒書簡の講義が開かれた。（同、1876年３月３日）つまり、学校内での基督教の授業は実質禁止されていたのである。明治26年、「高度な基督教教育の提供を保証して立ち上げられた」学校、熊本の「東亜學舘」でさえ、熊本県からの忠告で聖書が教育課程から除外され、副教科として教え」られていた。（S. L. ギューリックからクラーク宛、1893年２月８日付）

それでは、熊本洋學校において、生徒達は、いつ頃、どのような形で基督教を学ぶようになったのだろうか。生徒が基督教を学ぶようになった時期に関しては、複数の先行研究で「六年末、あるいは、七年初頭頃から・・・と考えられる」と推論されている。[14] しかし、資料に基づいて検討すると、この推論が少し異なる結果となり得ることを以下に表記し、洋學校における基督教教育の流れを再考したい。

海老名彈正（洋學校二級生）の教え子である渡瀬常吉の著作『海老名彈正先生』には、「明治六年の秋、ヂェーンズは、我々［海老名］の組に向かひ、聖書を讀みに來い、と勧めた。」[15]という記述がある。恐らく、先行研究本の多くは、この記述から洋學校生徒の聖書研究の開始時期を「六年末」からと判断したものと思われる。しかし、この記述の後には「・・・我々も亦、舊新約聖書の英譯を、貰ったので・・・」という文言が付記されていた。

ところが、明治６年聖書配布説を肯定しない当事者本人の証言が残されている。聖書の配布に関して、二級生、下村孝太郎は「洋學校を去る前年の冬」、即ち明治８年冬、「聖書（勿論英語聖書にして、四福音を別々にしたる小本）を生徒に配布し、自宅にて會讀をはじめたり」[16]と証言し、同様の証言[17]をする徳富蘇峰は、二級生（明治五年撰入）で退校し五級生（明治八年撰入）として再入学しているので、明治６年末には洋學校に在籍しておらず、聖書の配布が明治６年の秋だとは考え難く、従って、ジェーンズの自宅で聖書研究が始まったのが明治６年の秋だと断言し辛い。

洋學校一級生、横井時雄は、「三年を過ぎると次第に英語を理解できる者も現れ、［ジェーンズ］先生は、バイブルを学びたいと思う者がいれば家に来なさいと言われたので、それから毎週日曜日に数人が先生の自宅に行って聖書を読むことを始めた。」[18]（現代文に変換）と回顧した。一級生、小崎弘道は、天文学の授業には、天地の神秘により有神の信仰は自然なことであること、さらに、歴史の時間には、欧米文明の基礎は基督教の信念に基づくため聖書を理解する必要があることをジェーンズから学んだと証言している。[18] 一級生が天文学や歴史を修学する時期は、白川縣及び熊本縣（共に現・

熊本県）が発行した「坂上サカノウエ竹松の洋學校修学証明書」（熊本市教育委員会所蔵）に基づくと、新学期が９月に始まる洋學校において、前者が「第三周後半期」（「幾何、人體學、化學、星學、地質學、演舌、作文」）、即ち明治７年前半、後者が「第二周後半期」（「算書、地理書、代数學、歴史、作文、英話」）、即ち明治６年前半となる。ただし、坂上は三級生であるため、上級生も同じ課程を修めていた場合に限ることを付言する。加えて、横井の言う「三年を過ぎ」た頃を明治７年の新年と勘定すれば、明治７年初頭、一級生有志には少なくとも小崎の言う聖書を学ぶ土壌が整っており、聖書を学び出した時期と考えても差し支えはない。

二級生（明治五年撰入生）の宮川経輝は、「我級生が地理書を終わり、歴史を讀懸し頃なりしと覚ゆ二三の友人師の家に就きバイブルを學ぶと聞き余は憤激の情禁ずる能はず」と明かした。[16] 二級生、宮川が聖書を学び出したと回顧した「地理書を終わり、歴史を讀懸し頃」とは「第二周後半期」にあたり、二級生の課程では明治７年前半に相当する。

上記の内容を整理すると、生徒有志が聖書を学び始めた時期は、明治７年初頭から夏にかけてと考えるのが妥当のように思われ、翌８年冬にジェーンズは彼らに聖書を配布した。

また、二級生、海老名彈正は、「明治８年の春」、［熊本］鎮台の佐々木というクリスチャン軍医の要望で、ジェーンズが日曜日の礼拝を始めた時に学友達と通い出したと、具体的な時期を挙げて公言し、礼拝でジェーンズは聖書を読んで５、６分説教をしたとも付言した。[19] その後、明治８年６月15日[20]に、モンドレル師（Maundrell, Ven. Herbert、1840－1896）（J. D. デイヴィス曰く CMS［聖公会宣教協会］）とビショップ・バードン Burdon が熊本を視察に訪れた。この時、二級生の宮川は、彼らと基督教の理念や洗礼について議論しているが、彼は、洋學校の厳しい勉強の合間に１年程聖書研究を重ねた時点で、外国人伝道師と議論できるほど聖書に関する知識を深めていたことになる。明治８年下半期に入ると、生徒有志の聖書研究は、大いに進んだ。[16] 以上のように、熊本洋學校の場合も、ジェーンズの自宅というプライベートな空間で、有志生徒の聖書研究が始まったのである。

ところで、「４年間熊本で生徒に宗教を説いてきた」というジェーンズの記述は、明治７年頃から聖書研究が始まったとする生徒達の回顧と一見矛盾して見える。学校で生徒に基督教教育を行うことができなかった時代に、一部の生徒に自宅で聖書を教える以前から、ジェーンズはどのようにして生徒に宗教教育を行ってきたというのだろうか。

生徒が「第一周前半期」の「文字綴」の授業で用いた教科書はウェブスターのスペリングブック *The Elementary Spelling Book.*（Quarto Dictionary of Dr. Webster、1866年、熊本市教育委員会所蔵）であった。これは、単語の綴り字とその発音の間のルールを記し、さらに該当単語を盛り込んだ例文を付記することで、学習者に反復練習をさせる形式を取っている。同書には149のステップがあるが、学習者は、下記のように早い段階で、Bible や God という単語を含む例文に遭遇する。

> The Holy Bible is the book of God. (No. 26)
> God created the heavens and the earth in six days, and all that was made was very good. (No.32)

生徒達が西洋の聖書 Bible や神 God を最初に意識したのは、スペリングブックを用いた「文字綴」の授業だったと推察できる。また、小崎の回顧の通り、彼らは、天文学の授業から有神の信仰を、歴

史の授業では欧米文化の基礎を築いた聖書を理解する必要性をジェーンズから学んでいる。さらに、デイヴィスは「[熊本洋學校で] ジェーンズ大尉はユークリッド幾何学の問題を活用して基督教を教えることができました。」(クラーク宛、1877年2月19日付) と証言した。以上を鑑みて、ジェーンズは、洋學校の授業を通して、聖書研究の必要性を生徒に提起し、授業を通じて聖書に関する基礎的な知識を教授したという意味で、「4年間」基督教教育を行ったと述べたものと解釈する。

1876 (明治9) 年1月30日に花岡山結盟事件が起きた後、ジェーンズは、この事件の翌日と1週間後に、それぞれ別の人物に書簡を送付した。

前者の書簡 (1876年1月31日付) の宛先は山崎爲徳 (一級生、1857－1881) である。山崎は、洋學校在学中、聖書に関する議論をジェーンズに求めた時、山崎以上に「明快で的を射た発言をする者に、私はまだ出会ったことがない。」[21] とジェーンズに言わせた秀才である。ジェーンズは、開成学校に進学した山崎が江戸でも優秀な成績を修めていることを心から喜び、下級生の励みになっていると書き記した。しかし、残念なことに、便箋9枚の山崎への書簡は、最初の1枚目しか熊本市教育委員会に所蔵されていない。山崎への書簡は不完全であるうえ、これまで注目されてこなかった資料ではあるが、ジェーンズがクリスチャンとしての素養を高く評価した山崎に花岡山結盟事件の翌日の日付で書簡を送付していることから、残り8枚の便箋には恐らく前日の花岡山結盟事件の事情が詳記されているものと推察できるため、本節に特記する。

後者は京都のデイヴィスに宛てた書簡 (1876年2月7日付) である。ジェーンズは、「今から述べる情報をどこに宛てて出したらいいのか見当もつきませんでしたが、長崎のスタウト師 (Stout, Henry、1838－1912、長崎の米国オランダ改革派教会) から情報を得、この書簡を貴方に送付します。」という書き出しでデイヴィスに送書した。デイヴィスはジェーンズから届いた熊本の情報をほぼそのままの形で引用し、[22] ボストンのクラークに報告した。書簡の日付は2月23日である。つまり、花岡山の事件後ひと月も経たないうちに、洋學校に関する情報が京都を経由して海外に向け発信されたことになる。

> … この兄弟 [＝ジェーンズ] はこれらの若者を私達の牧師養成学校 [同志社英學校] に預けたいと願い続けています。彼は、[米国オランダ] 改革派教会の伝道団に所属するG. フルベッキ師 [Verbeck, Guido Herman Fridolin、1830－1898] の要請で来日しました。この国に、暗闇のただ中にあっても、熱く燃える太陽のように異彩を放つ男がいました。彼は、家族と単独で島の奥地に入り、5年間、彼も彼の家族も海岸に近づいたことはないと書簡に書いています。現在、彼の生徒のうち40人以上が、自らの意思で、キリストへの信仰に最も厳粛な誓いを立てて基督教社会に入り、必要であれば全てを捨て、主に従うのも厭わないと言っています。そのうち10人は神学校に入学するために待機しているところです。日本に招聘された全ての外国人がこの兄弟と同様なことを行っていれば、日本国民の半分以上は、主キリストにより救済されていたことでしょう。
>
> 彼は誰かがこの地域に来て、仕事を引き継いでほしいと希望しています。恐らく、京都から遠く離れたその地域には人を派遣することができないでしょうが、少しでも彼の力になりたいと考え、[平信徒の] 彼には、その地でビショップになって門徒に洗礼が施せるように、聖職授与式を受けた方がいいと書簡に書いて送ったところです。…

追伸：許可を取っていないので、名称は全て伏せています。(1876年２月23日付)

日本国の果ての「火の国」で放たれた「異彩」は、まさに、神の御心がこの日本の地でも偉功を収めつつあるという気持ちにさせてくれるような驚くべき新事実であると、デイヴィスはボストンのクラークに報告した。上記は、宣教師の視点に立って述べられてはいるが、ジェーンズの置かれた環境が端的に描写されている書簡である。

その後、ジェーンズは、熊本で、キリストに献身することを誓った一部の洋學校生に洗礼を施している。その日付に関しては諸説あるが、一級生、小崎弘道によると、「志道者一同がヂエーンスからバプテスマを受け」たのは花岡山結盟事件後の1876年「四月三日」[23]である。

3. ジェーンズの再就職

ジェーンズは、熊本洋學校閉校後、アメリカに帰国する心積もりをしていた。[24] 本節では、離熊後、帰国を予定していたジェーンズが大坂英語學校に雇用され、それから半年後に帰国した頃までの紆余曲折を追いたい。

ABCFM は、ジェーンズから届いた書簡を読んで、ジェーンズの「風格や気概」、「完璧な自然科学の教育、日本における経験、加えて、彼の献身的な基督教精神」全てが、これから京都に立ち上げるカレッジの管理者として相応しい人材だと評価し、ジェーンズに大きな期待を寄せた。デイヴィスは、生徒をキリストの道に導くためにも、宣教師を目指す男女を養成するためにも、伝道団は教育的に優れた結社でなければならず、そのためクリスチャン・カレッジをつくる必要があると考えた。当時、ジェーンズに科学領域教科の強化を託し、ジェーンズを同志社カレッジの校長に雇入れようと意欲を燃やしたのが、他ならぬデイヴィスだったのである。[25]

ジェーンズは、1876年７月４日にデイヴィスら三名の宣教師に宛てて[26]書簡を送った。ジェーンズの書簡を読む限り、６月11日日曜日にデイヴィスらからの書簡（６月３日付）が届き、その書簡でジェーンズはカレッジ設立への支援とカレッジ設立資金の調達を要望されていたことが推察できる。

しかし、ジェーンズは、「６月１日に、洋學校卒業生の一人を通じて、江戸の開成学校校長代理から教授職の雇用の打診を受け、この手紙が届く前の６月３日に快諾の返書」をしてしまったため、同志社カレッジ設立に支援できないと、７月４日付の書簡に認めている。また、書簡が出された1876年はアメリカ建国100周年記念の年にあたり、大統領選挙も行われるため、カレッジの資金調達どころではなくなるだろうとも述べた。つまり、彼は、［アメリカン・］ボードの求めた申し出に失礼のないよう辞退するために、書簡を落手して20日余り経た独立記念日を書簡の日付に選び、アメリカの大義を宣言する特別な日を巧みに利用して返書したものと見られる。さらに、同書簡で、ジェーンズは、熊本洋學校の任期が10月７日で終了するが、試験業務が終了する８月初旬に熊本を離れる予定をしており、８月の後半は休暇となることを告げた。つまり、「９月から［期限の10月７日まで］残された５週間、何もせずに［熊本に］いることは望ましくないと思うから、８月で熊本を離れる」と述べているのである。ジェーンズの律儀な性格も見て取れる書簡である。

その頃、京都のデイヴィスは、ジェーンズを同志社に雇い入れるため、本部ボストンには然るべき行動を取ってほしいと、クラークに書簡を書き送っていた。

… ジェーンズ大尉にこちら［京都］の仕事を手伝ってもらうなら、今が手を打つ絶好の機会のように思われます。この機会を逃せば、十中八九、彼は永久に江戸の官立学校に留め置かれることになるでしょう。彼が江戸で仕事を始める前に、カレッジの仕事に関して、貴方—即ち、ボード［本部］が然るべき行動を取ることを期待した上で、私達は、彼に、江戸へ行くなら6か月間だけ江戸の官立学校と契約を結ぶようにお願いしているところです。

当初から、明らかに、主の御手がこれまでこの件の万事を支配していて、現在、まさに一刻の猶予も許されない状況です。ジェーンズ大尉の学校の卒業生で、徹底的に教育され、厳しく躾けられた15名から20名の年若いクリスチャンが待機しています。［しかし、］元教師が［同志社に来て］私達と共に行動するか、それとも江戸［の開成学校］に行くかで、彼の生徒達の進路も大きく左右されてしまう可能性があります。一方、京都伝道団に宛てたジェーンズの堂々たる書簡が読み上げられるのを聞いた諮問委員会の委員は、一人たりとも、ジェーンズの雇入れをやめること、或いは、延期することに同意するとは思えません。… 私は、純粋に十二使徒の教えに従って、熊本に教会が創設され、その後、その教会が、自然な形で私達伝道団の支部になるのを、この目で確かめることができればと思っています。（クラーク宛、1876年7月4日付）

ところが、ジェーンズは、8月1日付の書簡で、デイヴィスら三牧師に「7月に、開成学校から、雇い入れの不採用通知を受けた」ことを報告した。この理由に関して、ジェーンズは、雇用の打診は洋學校の生徒を介して開成学校当局から受けたが、外国人教師の任命をしたのは文部省で、恐らく、熊本での騒ぎが手に余ったか、反対に遭って、役人がジェーンズを任命しようと思わなかったか、或いは、クリスチャンの生徒は一部にすぎないのに、文部省役人の気骨が強すぎて、半官立学校におけるジェーンズの業績が「伝道者」を「養成」或いは「育成」したことだと判断されたのだと思うと説明している。そして、「開成学校のビジネスを軽く考えすぎていたのかもしれないし、この特別職に僅かな期待を持ったところで、自分は日本における大勢の求職者の一人にすぎなかった」と付言した。学制頒布で、旧藩校などの学校が廃止された。ジェーンズの証言を鑑みると、外国人教師の雇入れが厳しくなったことで、外国人教師を取り巻く環境が転換期を迎えていたことが窺える。

さらに、ジェーンズは、任期が満了する10月7日まで熊本に留まる決心をした[27]ことも書き記していた。それは、「熊本を追われて去る生徒をできる限り多く見送りたい」と考えたからだと説明した。そのうえで、「基督教を信仰する生徒はまだいます。上記の数に入っていないかなり多くの生徒達が、いつでも責任を負い仕事ができる状態でいます。」と、改めて、同志社側に教え子の受け入れを求めたのである。

その後、デイヴィスは、「ジェーンズは大坂英語學校の短期採用を引き受けるでしょう。」（1876年10月16日付）、さらに、「神は、ジェーンズ大尉に帰国とABCFMの仕事を断念させましたが、大尉のために道を開き、彼は1878年7月18日まで大坂で奉職することになりました。」（11月3日付）とボストンのクラークに報告している。結局、ジェーンズは、1876年11月1日から1878年7月31日まで2年間の雇用契約を交して、大坂英語學校に赴任した。彼は、「大坂の仕事を引き受ける」ことにしたのは「日本当局［文部省］の要請もあったが、京都にいた私の教え子達がもっと長く近くにいてほしいと強く望んだため」[28]だと、後年回顧している。

上記の通り、ジェーンズの決起決断には教え子の存在が関わっており、慕ってくる生徒達に応えようとするジェーンズの深い愛情が感じられる。

一方、デイヴィスは大坂英語學校の内部事情について次のようにボストンに報告した。

> … 大坂の学校には、現在、彼の他に５人の外国人教師がいますが、その全員が基督教を激しく敵視し、教義としても、実践の対象としても、基督教を一切認めていません。
>
> ジェーンズ大尉は大いに失望し、長期間雇用されたことを後悔しているとともに、いつでも辞めていいとそれとなくほのめかしています。肥後からやって来た若者で、ジェーンズ大尉の勤める大坂の学校に入学したいと願っている生徒がいるのですが、学校の風紀がひどいため、大尉は彼が入学するのを認める気にはなれないと言っています。大尉は大坂の学校で影響力を持っている[29]のですが、生徒の身の破滅を恐れてそう考えているのです。…
>
> （クラーク宛、1876年11月18日付）

その後、彼は、ジェーンズが「大坂での仕事に終止符を打ち、教え子のもとを去るという考えが彼を苦しめているようだ」（クラーク宛、1876年12月30日付）と看取していたが、結局、ジェーンズは勤務し始めてから半年にも満たない４月10日に大坂英語學校を依願退職し、翌月帰国している。ジェーンズの幼い息子に続き、妻まで重篤な腸チフスに感染したうえ、彼自身は目を酷使し、全く合わない眼鏡をかけて日ごとに増す苦痛に耐えていたが、家族の体調が回復して航海できるようになると、アメリカに帰国したのである。[30]

その後、再来日した後も、ジェーンズが同志社に奉職することはなかった。ここで、その理由を考察したい。

書簡を通して見る限り、書簡を郵送するために要した時間と、伝道団の中にカレッジ設立に反対する宣教師がいた[31]ことが挙げられる。前者に関して、ジェーンズは、「今［８月１日］からでは、［自分が熊本を離れる10月７日までに］ボストンと往復書簡を取り付けることができない」（デイヴィス、ギューリック、ゴードン宛、1876年８月１日付）と書き記している。諸々の事情も絡んでくるだろうが、書簡の記述を頼りに計算すると、郵送には、京都から熊本まで片道８日、[32]日本からボストンまで片道６週間程度[33]を要した。ジェーンズは、ボードが彼にカレッジ設立の協力を求めた書簡は「即刻良い返事を送るべき話だった」（1876年７月４日付）と述べているため、当時の郵送にかかる時間がもう少し短ければ、或いは、初動はもちろん本部ボストンとも相談しなければならなかった要件で、ボード本部の初動があとわずか早ければ、ジェーンズ自身も、教え子を託した同志社に籍を置いた可能性は高かっただろう。

ただ、江戸・開成学校の教授職はジェーンズの心を引き付けて止まなかったことが、書簡などを通して推察できる。「時折、別の所から明確な雇用の依頼があったが、帰国するつもりでいたので、辞退するか無視してきた」（デイヴィス宛、1876年７月４日付）中で、彼は開成学校からの照会には応じていたのである。その理由として、まず、前述の通り、複数の洋學校卒業生がすでに開成学校に在籍していたことが挙げられる。また、東京には、日本で暮らすうえでジェーンズに助言を与えてくれる友人がいた。[34]さらに、彼は開成学校の校長も副校長も「忠実で熱心な基督教徒」と知って、「江戸の学校には困難などなく、恐らく偏見も一切ないだろう」（1876年７月８日付）と考えたからである。

一方、ABCFMは、ジェーンズに、伝道団に正式に加入して事業を行うことを要請し、彼の人望を見込んでカレッジ設立資金を調達してほしいと望んだが、ジェーンズはこの両方を負担に思ったことが書簡から推察できる。伝道団の加入に関して、ジェーンズは、「自らの気持ちが切れてしまわないためにも、どの組織にも加わらず、現在の独立した自由な立場を貫きたい」(1877年4月16日付)と述べ、ボードへの加入を辞退している。そして、資金調達に関して、彼は「アメリカに帰国すれば喜んで」行うが、日本で教職に就いている間は「恐らく手が回らないだろう」と書簡に書き記した。その理由に関して、ジェーンズは、「ボードが要請する牧師養成学校初等科学分野の組織運営は、熊本洋學校ですでに実践しており、責任が分散され、付加される重責もなく、対立する計画もなかった[熊本の]環境の中でさえ、生徒に教授することはそれだけで十分に大変な仕事だった」(1877年4月16日付)からだと説明した。

さらに、ジェーンズが同志社に奉職することがなかった理由を別の観点から論じるために、デイヴィス書簡26通の中には、ジェーンズ、フルベッキ、そして、W. E. グリフィス(Griffis, William Elliot、1843－1928)の三名だけが官公吏と伝道団関係者以外の成人として記述され、後者二名はジェーンズを説明するために登場しているということを挙げたい。デイヴィスは、「生徒をキリストの道に導く学校をつくるために、私達は祈り、努力しているのに、開成学校退職後、帰国して神学校に入学したグリフィスは、日本にいる時も帰国した今も、伝道団の仕事に対して反対の態度を取っている」と書き記した。[35] グリフィスが突如一度だけデイヴィスの書簡に登場したのは、ジェーンズは平信徒であるにも拘らず聖職者になったグリフィス以上の働きをしていたという意味にも取れ、さらには、そのように献身的なジェーンズがどうして平信徒なのかという気持ちが込められているとも考えられる。つまり、ジェーンズがボードの加入を断り、平信徒のままでいたことも、ジェーンズが同志社で奉職できなかった理由の一つとして挙げることができるのかもしれない。

さらに、この8年間の書簡には、ジェーンズが大坂英語學を辞職して帰国する際、ABCFMは旅費として彼に1500ドルを融通したが、その返済を巡り、ボストン本部と、京都伝道団、ジェーンズの間で意識のずれがあった[36] こと、妻ハリエットの神経が病んだ[37] こと、1878年ABCFMの職員応募要領(願書)がうまく送付されなかった[38] こと、そして、同年、ジェーンズは日本に戻り同志社に奉職する予定になっていたにも拘らず、「家庭内の理由」で実現しなかった[39] こと等の経緯も書き残されていた。

以上の書簡から考察できる理由を鑑みると、ジェーンズが同志社に奉職することになったとしても、その道程は決して平坦なものではなかっただろうと推察できる。その後、ジェーンズが妻ハリエットとの離婚裁判を終えて、小崎弘道(当時、同志社社長)らの尽力で第三高等中学校の職を得、再来日を果たすまで、15年余りの年月を待たねばならなかった。

4. 同志社における元熊本洋學校生

デイヴィスの書簡には、彼が同志社英學校に進学した元熊本洋學校生と接する中で、熊本洋學校での教育の質の高さと、ジェーンズの生徒に対する影響力を証言する叙述が数多く見られた。本節では、書簡を通して、ジェーンズの講義スタンスや、彼の教育理念に基づいて、牧師を目指し粛々と勉学や宗教活動に励んだ元洋學校生の生活を提示したい。

ジェーンズが自らの講義スタンスを述べたのが、1876年7月8日付の書簡である。彼は、「熊本洋

學校では洋書を用いて授業を行った」ので、「原書に基づいてつくられてはいるが日本語で書かれ」た教科書を使う同志社で、自分は「役に立てそうにない」と書き記した。さらに、「来熊した当初は通辞もついたが、必要ないのですぐに辞めていった。今後も自分は日本語を話すつもりも、日本語が分かると告白するつもりもなく、熊本を離れても『英語で授業を行う』やり方を変える予定はない。」と宣言した。このような教育を受けた熊本の生徒達は、大いにジェーンズの感化を受け、師の英語による授業を通して彼らの知的精神的な欲求が満たされていったことは容易に推察できる。[40]

ジェーンズと同志社に在籍する彼の教え子の伝道方法に関して、デイヴィスは以下のようにボストンに報告した。

> … ジェーンズ大尉は、簡単な用語で現地の人々に福音を解こうと試みる一流の人物です。彼の教え子である熊本の若者達は、私が聞き及んだ中で、祈祷や説教の際には、誰もが理解できるようにごく簡単な用語を使って説いた最初の日本人伝道師です。
>
> ドーン師も、「熊本の生徒は、私達の周りにいるどの人よりもはるかに抜きん出ています。」と言っています。彼らの理解力と思考能力は見事としか言いようがありません。聖書を学ぶにしても、訓練を受けていない日本人が1年以上掛かって行えることを、彼らは1か月で習得できると思います。彼らの祈りや説教は、気取りがなく、聴衆が理解できるようにと考え抜かれています。…
>
> (クラーク宛、1876年11月3日付)

上記の書簡から、ジェーンズの説教の姿勢が、確実に彼の教え子に受け継がれていることが窺える。また、デイヴィスは、ジェーンズの伝道理想論を、下記のようにボストンのクラークに伝えた。

> … [ジェーンズ大尉は、] 若者が、[将来、自分達の活動拠点を学校の] 外に出て見つけ伝道活動を始める時、彼らに給与を与えないでしょう。一切、彼らに手を差し伸べることはなく、彼らも奉仕の情熱が備わってさえいれば何も望まないはずですし、福音と共に生きることが運命づけられていると信じているからこそ、キリストに帰依しながら、宣教活動を進めていくことでしょう。そして、彼らに手を差し伸べなければならい時は、土地の人々が必ず彼らを支えてくれるはずです。… (クラーク宛、1876年12月30日付)

何とも凄まじいジェーンズの生徒に対する伝道教育計画であるが、彼の教え子達はこれを受け入れ、謙虚に実践した。

> … ジェーンズ大尉の学校の卒業生を例に取ってみましょう。彼らは、現在、私達の京都牧師養成学校 [=同志社英學校] に在学しています。私達は、彼らがそれぞれパウロのような青年となり、日本国土の半分を布教できればと思っています。彼らの誰もが貧しく、親から勘当され、持ち物は、概ね、英語版の聖書と衣類だけで、これを背負って [伝道して] います。彼らは英語の教育を受けていて、その知識を持っています。ですから、もし彼らに官公吏になる気持ちがあるなら、労せず月100ドルを稼ぐことができるでしょうし、日本の良好

> な公務員制度に従って、１、２年の間に昇進することも可能でしょう。[ところが、] 彼らはここ京都で奉仕して、月に３ドル50セントを受け取り、そのうえ、今よりずっと困難な場所で福音活動をするための準備をしています。彼らは、ボードから借りた授業料など、毎月２ドル50セントを返済しています。ですから毎月手元に１ドルしか残らず、今の寒い冬の時期も、衣服、照明、食料、ペン、鉛筆、切手、書籍、銭湯、散髪、洗濯の費用など、…この１ドルで賄っているのです。…
> (デイヴィスからクラーク宛、1877年2月20日付)

因みに、1876年10月16日の時点で、熊本出身の同志社英學校在学生22名と２、３日のうちに加わる予定の４、５名のうち、10名は洋學校の第一期卒業生［一級生］と第二期卒業生［二級生］で、他は同校の１年生［五級生］、２年生［四級生］、３年生［三級生］であった。同年12月４日の時点では、熊本からの在籍者が30名に増え、そのうち熱心なクリスチャン19名は毎週定期的に福音を説いていた。[41]

さらに、デイヴィスは、定期試験で元洋學校生が修めた優秀な成績を次のようにボストンに報告した。

> … 私は先週の試験の結果にすっかり驚いたのですが、伝道団員一同、思いは同じでした。これらの若者—ジェーンズ大尉の学校の卒業生は、様々な意味で私達を驚かせています。筆記試験については、彼らの大半が見事なまでに完璧な答案を書いています。彼らは、メシヤ詩篇 The Messianic psalms は日本語で指導を受け、自然神学 Nat. Theology と証験論 The Evidence of Christianity は講義を受けていました。サンプルとして、試験ごとに答案を１つずつ同封致します。英文法、算術、歴史の科目はほとんど満点で、中には英語で解答する者までいました。
> (クラーク宛、1876年12月30日付)

ジェーンズは、伊勢時雄（横井時雄、1857－1927、横井小楠の長男）から、「デイヴィス牧師達が、洋學校に通っていた生徒は代数学や幾何学を教えることができないか尋ねていた」ことを知った。これに対して、彼は、「[洋學校] 生徒には二年、一部の者にはそれ以上の教職経験があり、適切に管理されていれば、代数や幾何学など初等科学の指導教官には、私なら、現在日本にいる大半の外国人教師より彼らの方を選ぶだろう」（デイヴィス宛、1876年７月８日付）と回答している。その後、デイヴィスは、「熊本の卒業生達が担当した科目で最高点が出たのには、さすがに脱帽しました。」（クラーク宛、1876年12月30日付）とボストンに報告した。

これらの書簡により、元洋學校生は、優秀な生徒として或いは助教として真価を発揮し、熱心な者は、伝道の厳しいインターンシップまで行って、奉仕で得たお金から授業料などを返済した残りで倹しい生活をしていたことも明らかになった。

以上を鑑みると、熊本洋學校の教育原理は、自ら知識を習得することに加え、他の者に知識を与えることであったと言える。これは、組織的指導において、ジェーンズが方法論の問題よりむしろ人材育成の必要性を重要視したためであろう。

書簡を通して見える初度来日時のジェーンズの功績は、熊本で育て上げた生徒の学業成績の高さと、彼らの同志社での伝道活動における真摯な姿勢に集約されていると言えよう。

結びにかえて

書簡には、一度目の来日におけるジェーンズの波乱に満ちた足跡が詳しく綴られていた。花岡山結盟事件後、ジェーンズは熊本を離れた。基督教教育に関与したことが原因したのか、彼の開成学校への雇用は破談した。その後、ジェーンズは、洋學校の６割の額ではあったが、職員中最高額の給与[42]で、主任として[43]大坂英語學校に雇用された。これは、「物理化學ノ大意ヲ傳習スルニ足ルノ人材」[44]を求めた同校及び文部省が、ジェーンズの熊本洋學校における科学教育の業績、つまり、基督教とは関係のない彼の功績を認めたためであろう。また、熱心なクリスチャンであったため、大坂英語學校では、同僚外国人教師の非基督教的振舞いにひどく失望した。さらに、ジェーンズが熱心なクリスチャンであっても、優秀なクリスチャンを育てた実績があっても、あとわずか同志社との距離が縮まらなかったのは、彼が平信徒であることに固執したためだったと推察できる。

明治６年にキリシタン禁制の高札が撤去されたとはいえ、基督教に対する反感がまだ強かった日本社会[45]と、平信徒を軽視する傾向があったとも思える基督教共同体[46]が交錯する狭間で、ジェーンズがデイヴィス書簡の話題の中心に座していたことは、一考に値する。それは、ジェーンズが熊本洋學校で生徒に智情意を健全に発達させる努力を重ねた情熱が引き寄せた成果であろう。日本を離れたあとも、ジェーンズは「海の向こうから、熊本洋學校の教え子達の活躍を信じて疑わず、自分の心は日本にいる生徒の心と共にある」（クラーク宛、1877年10月１日付）と吐露し、熊本で共に過ごした教え子に対する思慕は強い。書簡を通して見る限り、ジェーンズの最初の来日における業績は、熊本洋學校で若者を啓発したことであると言える。この点を念頭に置き、明治26年の再来日以降におけるジェーンズの研究を進めたい。

【注】

本稿で取り扱った英文書簡和訳、及び、*KUMAMOTO* の和訳は筆者の翻訳によるものである。また、書簡の記述内容を分かり易くするために、原本の前後の意味を踏まえて［ ］を補った。

1 書簡のマイクロフィルムが同志社大学図書館、同人文科学研究所、並びに同神学部に保管されている。
2 プリンストン大学図書館の資料の一部のコピーが保管されている。熊本市教育委員会事務局生涯学部文化財課から閲覧と複写の許可を得た。残念なことに、コピーはそれぞれ一部分しか保管されていない。
3 1875（明治８）年に新島襄、山本覺馬と共に同志社英學校を立ち上げたアメリカン・ボードの宣教師。
4 クラークの行政を最も顕著に特徴づける二つの出来事はジャパン・ミッション（1869年開設）と婦人宣教師部をつくったことである。（井上勝也「アメリカン・ボードの資料を通して見た初期の同志社」『同志社談叢』第１号、同志社大学、1981年、47頁。）
5 石井容子『熊本英学史および日本英学史における Capt. L. L. Janes の意義と貢献—Encounter divinely programmed—』熊本県立大学大学院文学研究科修士論文、2007年、７頁。
6 明治4年閏10月20日に洋學所が再興され、11月14日、洋學所規則を制定して、入学志願者を募った。熊本洋學校は開校時にこの洋學所を改称したものである。

7 ユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』小学館 1975年、286頁。

8 「実のところ、日本帝国の支援は、学校創立三年目の終りに、即刻撤回され、現在その見直しが行われているところです。洋學校の課程は、洋學校が永続的な機関であることを見越して、その修業年を最低四年として組んでおり、生徒、保護者、そして実学党の皆様には、どれ程期待を裏切ってしまったか、容易に推察できます。まるで、暗雲がこの小さな地域社会全体に立ち込めたかのようでした。」Janes, L. L. *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism.* (京都 同志社 社史々料編集所、1970年) p.129.

9 石井容子「L. L. ジェーンズ大尉と熊本洋學校—教師館までのルート及び熊本洋學校最高—」『熊本大学社会文化研究』8、熊本大学大学院社会文化科学研究科、2010年、69頁。

10 大坂英語學校「明治九年檢印簿」京都大学大学文書館所蔵。

11 大坂英語學校「明治十年四月補助金定額常費内譯表」京都大学大学文書館所蔵。

12 山田武甫も実学党員で、明治4年7月14日に「廃藩置県ノ詔」が発せられると、熊本県参事となった。明治7年には敦賀県令に招聘された。

13 村口一雄『我観 熊本教育の変遷』第一書房、1983年、56頁。

14 同志社大学人文科学研究所『熊本バンド研究』みすず書房、(1965年初版)、1997年 (新装版)、178頁。同様の記述が田中啓介『熊本英学史』本邦書籍、1985年、111頁にも見られる。

15 渡瀬常吉『海老名弾正先生』龍吟社、1938年、86頁。

16 福永文之助『日本ニ於ケル大尉ヂエンス氏』福音社、1894年、下村91頁、横井149頁、宮川133頁、「明治8年下半期には聖書研究が大いに進んだ」32頁。

17 「當時長崎にスタウトといふ宣教師があって、そこから凡有る聖書及びトラクト (基督教宣傳の文書) の類を取り寄せ、それを生徒に分配した。・・・當時洋學校第一回の入學生は卒業してゐたが、彼等は他に行くところもなく、尚ほ學校に止ってゐた者があった。」徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、1935年、61頁。

18 小崎弘道『七十年の回顧』大空社、1992年、17頁。

19 海老名彈正「熊本洋學校と熊本バンドと」(講演速記) 時・昭和10年6月13日、處・熊本偕行社。

20 モンドレルらが来熊した日付は、離れた地域に保管されている2つの書簡、A letter from L. L. Janes to J. H. Stout dated on February 14, 1876. (熊本市教育委員会所蔵) 及びA letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, Kyoto, dated on Jul. 8, 1876. (同志社大学所蔵) を照合して確認することができた。

21 Janes, *op. cit.* Ⅲ, p. 69。山崎は開成学校に進学し、その後同志社に転学した。同志社英學校卒業と同時に同志社教員を勤めたが、明治14年に早世した。(同志社記事、明治8年8月～明治21年5月)

22 デイヴィスは、「本人から許可を取っていないので名称は伏せます。」と但し書きを添え、「日本の南西部に位置する九州という島の中心部にある」学校 [熊本洋學校] でアメリカ人教師 [ジェーンズ] が4年半以上学校の管理に携わっていること、学校の学習課程は4年であること、一級生は昨年の夏に卒業し、二級生は今年7月に卒業すること、去年の卒業生の数人と、7月に卒業する二級生の多くがクリスチャンで、熱心な信者であること、彼らは魂を救済する仕事に一層精進していくだろうということを伝えている。

23 小崎弘道, *op. cit.* 22頁。

24 A letter from L. L. Janes, Kumamoto to J. D. Davis, O. H. Gulick. W. L. Gordon, Committee of the American Board Mission in Japan, Kyoto, dated on Jul. 4, 1876.

25 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Nov. 3, 1876.

26 Rev. J. D. Davis、Rev. O. H. Gulick、Rev. W. L. Gordon (Committee of the American Board Mission in Japan) の三名の牧師への書簡である。

27 A letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, O. H. Gulick, W. L. Gordon, Kyoto, dated on Aug. 1, 1876.

28 A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878.

29 同校でジェーンズは主任を務めた。大坂英語學校「明治九年檢印簿」京都大学大学文書館所蔵。

30 A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878.
A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Sep. 17, 1879.

31 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Nov. 3, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 30, 1876.

32 A letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, O. H. Gulick. W. L. Gordon, Committee of the American Board Mission in Japan, Kyoto, dated on Jul. 4, 1876.

33 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 16, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Jun. 17, 1876.

34 「東京在住の思慮深い外国の友人は、家族が食べる野菜は特別に用意するようにと警告した。」(Janes, *op. cit.* p. 60.)

35 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 19, 1877.

36 A letter from L. L. Janes, Yokohama, to A. H. Adams, Kobe, dated on May 9, 1877.
A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878.

37 A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878.

38 A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Apr. 2, 1878.
A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Sep. 17, 1879.

39 A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Sep. 17, 1879.

40 小崎は、「私達（同志社に進学した元洋學校生）は、邦人教師は日本語で、米人教師は英語で教授してほしいと迫り、やむを得ずその要求が採用された。級中には英語を知らない生徒も多くいたが、英語を用いることが多くなるにつれ、次第に退校したので、私達が卒業する頃には全級は洋學校の出身者のみとなった。」（現代文で要約）と回顧している。（小崎弘道, *op. cit.* 38－39頁、42－43頁。）

41 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Oct. 16, 1876.
山崎爲徳が、ともに開成学校を中退した横井時雄らと京都・同志社英學校を目指して横浜港を発ったのは、1877（明治10）年９月５日（高橋光夫、『山崎爲徳の生涯』山崎爲徳を顕彰する有志の会、2010年、135頁。）で、山崎も横井も、1876年の同志社在学生/在学予定者には含まれていない。

42 大坂英語學校「明治九年十一月補助金定額常費内譯表」京都大学大学文書館所蔵。

43 A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 30, 1876.
大坂英語學校「明治九年檢印簿」京都大学大学文書館所蔵。

44 大坂英語學校「第八學年　從明治九年九月　至同十年八月　年報」明治十一年三月刊行、及び、「明治九年從一月至八月年報」明治十年十二月刊行　京都大学大学文書館所蔵。

45 しかしながら、浮田和民（二級生、当時米国に留学中）は、「熊本に於いて基督教に對する迫害の最中にも反對派營て一言のヂエンス氏が躬行を非難する者ありしを聞かず」と、ジェーンズは熊本全体に受け入れられていたことを回顧している。(「歸鄉後のヂエンス先生」)

46 ジェーンズの妻ハリエットは、「説教者として一次勢力ありし北米外邦傳道史上名門の末裔たるヘンリー、マルチン、スカツダル氏の娘」だった。帰郷後、ハリエットは、ジェーンズの不貞を理由に離

婚訴訟を起こしたが、ジェーンズに不貞の証拠はなく、長い裁判の末、ジェーンズの勝訴となった。浮田和民は、ジェーンズの名誉回復のために、数回書面でアメリカン・ボードに意見を求めたが、「ヂエンス事件に對しては宣教師中一人の是を辨護するもの無かり」と書き記した。(「歸郷後のヂエンス先生」)

【引用・参考文献】

・ジェーンズ書簡（プリンストン大学図書館のキャプテン・ジェーンズ資料のコピー［部分］)、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課所蔵。

A letter from L. L. Janes to Father dated on April 7, 1875.

A letter from L. L. Janes to Mother dated on June 2, 1876.

A letter from L. L. Janes to J. D. Davis dated on February 7, 1876.

A letter from L. L. Janes to J. H. Stout dated on February 14, 1876.

A letter from L. L. Janes to Carter dated on May 26, 1874.

A letter from L. L. Janes to Tamenori Yamazaki dated on January 31, 1876.

・ジェーンズ関係書簡（プリンストン大学図書館のキャプテン・ジェーンズ資料のコピー［部分］)、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課所蔵。

A letter from Taketosi Yamada to L. L. Janes dated on September, 1875.

・ジェーンズ書簡（アメリカン・ボード宣教師文書)、マイクロフィルム、同志社大学所蔵。

A letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, O. H. Gulick, W. L. Gordon, Committee of the American Board Mission in Japan, Kyoto, dated on Jul. 4, 1876.

A letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, Kyoto, dated on Jul. 8, 1876.

A letter from L. L. Janes, Kumamoto, to J. D. Davis, O. H. Gulick, W. L. Gordon, Kyoto, dated on Aug. 1, 1876.

A letter from L. L. Janes, St. Dennis, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 2, 1878.

A letter from L. L. Janes, Osaka, to The Members of the American Board Mission in Japan, Kyoto, dated on Apr.16, 1877.

A letter from L. L. Janes, Yokohama, to A. H. Adams, Kobe, dated on May 9, 1877.

A letter from L. L. Janes, Elk Ridge Farm, Saint Dennis, to N. G. Clark, Boston, dated on Oct. 1, 1877.

A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878.

A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 14, 1878.

A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Apr. 2, 1878.

A letter from L. L. Janes, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Sep. 17, 1879.

・デイヴィス書簡（アメリカン・ボード宣教師文書)、マイクロフィルム、同志社大学所蔵。

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 23, 1876.

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 3, 1876.

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 7, 1876.

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 15, 1876.

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 14, 1867.

A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 14, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 16, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 19, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Mar. 31, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to S. B. Treat, Boston, dated on Jun. 7, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Jun. 17, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Jul. 4, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Jul. 24, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Aug. 16, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to E. T. Doane, Boston, dated on Sep. 18, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Oct. 16, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Nov. 3, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Nov. 18, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 4, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 18, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 18, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 30, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 30, 1876.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 15, 1877.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 19, 1877.
A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 20, 1877.

・O. H. ギューリック書簡（アメリカン・ボード宣教師文書）、マイクロフィルム、同志社大学所蔵。
A letter from O. H. Gulick, Kobe, to L. L. Janes, Kumamoto, dated on Jul. 26, 1876.
A letter from O. H. Gulick, Kobe, to N. G. Clark, Boston, dated on Jun. 24, 1879.

・S. L. ギューリック書簡（アメリカン・ボード宣教師文書）、マイクロフィルム、同志社大学所蔵。
A letter from S. L. Gulick, Kumamoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 8, 1893.

・Janes, L. L. *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism.* (Kyoto: 京都同志社々史々料編集所, 1970).
・Notehelfer, F. G. *American Samurai: Captain L. L. Janes and Japan.* (Princeton: Princeton UP, 1985).
・新熊本市史編纂委員会『新熊本市史　別編』熊本市　2003年。

Capt. L. L. Janes and His Students of the Kumamoto Yo-Gakko during His First Stay in Japan: An Inquiry into Letters in Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions and Captain Janes' Materials.

Ishii Masako

Capt. L. L. Janes, who guaranteed high-quality education and welfare to the students at the Kumamoto Yo-Gakko between 1871 and 1876, lost his teaching job after his students signed the covenant called Hokyo-shui-sho at the top of Hanaokayama. Then, although he was hired at the Osaka English School, he went back to the United States six months later. The letters reveal not only Rev. Maundrell's contact with some of Janes' students in the summer of 1875, but also Janes' footsteps after his retirement from Kumamoto to Osaka, a neighboring prefecture of Kyoto, a strong bond between him and his students, and the excellent academic performance and serious mission work of the students who entered the Doshisha School, Kyoto, from the Kumamoto Yo-Gakko. Moreover, this study scrutinizes his self-respect as a layman holding religious enthusiasm, which brought him a series of hardships. These letters indicate that Janes' landmark achievement was to enlighten his students in Kumamoto.